

ネギ黒腐菌核病の総合防除について

ネギ黒腐菌核病は、比較的低温（5～20℃）を好む土壌病害で、本県でも越冬栽培の増加とともに、各産地で問題となっています。本病が一度多発生すると、菌核が土壌に長期間生き残り、その後のネギ栽培で発病するため、防除が困難となります。このため、**薬剤防除だけでなく耕種的防除や物理的防除手段を組み合わせ、総合防除を行いましょう。**

病徴および生態

（初夏どりや夏どり栽培のネギ）

低温期に感染し、4～5月頃に下葉（外葉）の黄化、株のしおれから生育不良となり、次第に全体が萎縮して黄白色となり、激しい場合には株が枯死します。発病株の根張りは悪いので、容易に株を引き抜くことができ、発病株の地下部は黒く腐敗しています。よく見ると黒変部の表面にゴマ粒大の黒い菌核が多数形成されています。伝染源は土壌に残った菌核で、ネギが定植されると発芽して菌糸を伸ばし、ネギに侵入します。菌糸の活動は、比較的低温の時に活発になり、菌核は土壌中で4～5年と長期に生存するため、難防除の土壌病害となっています。

防除対策

<1. 耕種的防除>

- 1) 発病を早期に確認し、早急に発病株を抜き取って圃場外に持ち出し、土中深く埋めるなど、適切に処分してください。また、未発生ネギ圃場への病原菌核の侵入を阻止するため、耕起など管理作業は未発生や発病の少ない圃場から行い、多発生圃場は最後に行います。なお、作業終了後はロータリー等の洗浄を丁寧に行ってください。
- 2) 本病は**土壌が酸性の場合ほど発病しやすい**傾向があるため、栽培前に石灰資材等を施して、**PH6.0～7.0 に調整**します。また、土寄せ時の石灰資材施肥効果が有効との事例があります。
- 3) 土壌中の菌核は長期に残存するため、多発生圃場では連作を避け、**ユリ科以外の作物で比較的長期の輪作**を行います。輪作作物としてソルゴーやカラシナなどの栽培は、発病を抑制することが知られています。
- 4) 本病の菌糸活動が低温期に活発となるため、**栽培時期は低温期を避けて、3月以降に定植する夏秋どりや秋冬どりに転換**することにより発病を抑制し、十分な収穫を得ることができます。

<2. 物理的防除>

- 1) **土壌還元消毒や夏季の太陽熱土壌消毒は、菌核の死滅に有効**（営農News7/9 第3162号、7/23 第3168号参照）との事例があります。

<3. 化学的防除>

- 1) **土壌消毒剤**：（各薬剤の詳細な処理方法については、ラベルで確認してください。）
効果の安定および圃場周辺へのガス被害を防ぐため、処理後**土壌表面をビニル等で被覆**してください。

表1 ネギ黒腐菌核病の主な土壌消毒剤

（令和6年10月30日現在）

薬 剤 名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数
ディ・トラベックス油剤	30～40L/10a 土壌注入	播種または植付の14日前まで／1回
ガスタード微粒剤 または バスアミド微粒剤	30～60 kg/10a 均一に散布して土壌と混和	播種又は定植の14日前まで／1回
キルパー	60L/10a 表面散布後土壌混和 60L/10a 土壌注入	播種又は定植の10日前まで／1回

2) 定植前や生育期に灌注や散布する薬剤

フロアブル剤では定植前の苗または定植直後に必ず1回目の処理を行い、さらに約1か月後に2回目処理を行うことにより高い効果が認められるとの事例があります。なお、モンガリット粒剤の低温期処理では、生育遅延等の恐れがあるため、使用時期に注意が必要です。

表2 ネギ黒腐菌核病の生育期に処理する主な防除薬剤

（令和6年10月30日現在）

薬 剤 名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数	分類
パレード20フロアブル	100倍 鉢成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊 (30×60cm、使用土壌約1.5～4L) 当り0.5L灌注	育苗期後半～定植当日／1回	7
	2,000倍 (散布)	収穫前日まで／3回以内 (灌注は1回)	
アフエットフロアブル	1,000～2,000倍 (1L/m ² 株元灌注)	収穫14日前まで／2回以内	7
セイビアフロアブル20	1,000倍 (散布)	収穫前日まで／3回以内	12
モンガリット粒剤	6 kg/10a 株元散布	収穫14日前まで／3回以内	3

注) 表の分類欄には、FRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。